

ドイツのベルリン、ヴァンゼー湖畔の邸宅で開催されたという、“ヴァンゼー会議”とは？タイトルは『ヒトラーのための虐殺会議』とされ、イントロダクションには「史上最も恐ろしいビジネス会議、開催」と書かれているが、それは一体なぜ？そして、その議事録は如何に？

ヴァンゼー会議の議題は「1,100万のユダヤ人絶滅政策について」。より具体的には、①移送、②強制収容と労働、③計画的殺害、の3つだ。パンフレットにある議事録（後掲資料①）には、出席者や議事録作成日、作成者等も明記されているが、肝心の（？）議事録はそこには添付されていない。

本作は、マッティ・ゲショネック監督が映画会社からヴァンゼー会議についての映画を作ろうとオファーをもらったことから企画が始まったそうだが、とにかく、その議事録に注目！そして、この企画に拍手！

■□■ 15名の出席者の名前と肩書きは？内部対立の有無は？ ■□■

会議の規模は、大人数のものから少人数のものまでいろいろだが、90分の会議で所定の議題について実質的な議論をするためには、10～20名程度の規模が適切。それ以上になると、どうしても形式的な会議になりがちだ。ちなみに、中国共産党の常務委員会は、いわゆるチャイナセブンと呼ばれる7名だし、日本の閣議は20名弱だ。また、私は約15年間、監査役として、月に一度東京で開催される株式会社オービックの取締役会に出席したが、その構成メンバーは約10名だった。

他方、閣議は、内閣総理大臣を中心に各省庁の大臣で構成されるが、ヴァンゼー会議は閣議でもなければ、ナチス党の会議でもない。あくまで、「1,100万のユダヤ人絶滅政策について」という議題を討議するために、国家保安本部長官のハイドリヒの主催で開かれた会議だから、まずは、その出席メンバーとその肩書きに注目する必要がある。しかして、ヴァンゼー会議の出席者15名の名前と肩書きは、パンフレットにある後掲資料②のとおりだ。それを大別すると、①ハイドリヒをトップとするナチス党や親衛隊の幹部、②党・首相官房局長や内務省、外務省等の官僚、③ポーランド総督府次官をはじめとする占領地の管理責任者の3グループになる。

本作導入部では、ヴァンゼー会議の出席者たちが次々と車で到着し、開始までの時間をグループ毎に軽いお喋りをしながら過ごす風景が描かれるが、それを見ていると、3つのグループの思惑がバラバラであることがよくわかる。つまり、1939年9月1日にポーランドへの侵攻を開始したナチス党率いるドイツは必ずしも一枚岩ではなく、それなりの内部対立（抗争？）もあったわけだ。

■□■ 37歳のハイドリヒと35歳のアイヒマンに注目！ ■□■

私は『ハンナ・アーレント』（12年）（『シネマ32』215頁）の評論で「ナチス・ドイツを率いたアドルフ・ヒトラーに忠誠を誓い、反ユダヤ主義を貫いた、極悪非道の「三

悪人」は、まず①宣伝大臣のヨーゼフ・ゲッベルスと、②ナチス親衛隊全国指導者のハインリヒ・ヒムラーの2人が有名。そして、その3番目には、地位こそナチス親衛隊中佐と低い、「ユダヤ人問題の最終的解決」(ホロコースト)に関与し、数百万人の人々を強制収容所へ移送するにあたって指揮的役割を担った、アドルフ・アイヒマンが挙げられる。」と書いた。

「アイヒマン裁判」は有名だから、アイヒマンに焦点を当てた「ナチスもの映画」には、①『アイヒマンを追え！ナチスがもっとも畏れた男』(15年)、『シネマ39』94頁)、②『アイヒマン・ショー 歴史を映した男たち』(15年)、『シネマ38』150頁)、③『アイヒマンの後継者 ミルグラム博士の恐るべき告発』(15年)、『シネマ39』101頁)、④『ハンナ・アーレント』等がある。なぜか、ヒムラーに焦点を当てた映画を私は観ていないが、ゲッベルスに焦点を当てたナチスもの映画は、①『ナチス第三の男』(17年)、『シネマ43』210頁)と②『ゲッベルスと私』(16年)、『シネマ42』未掲載)等だ。他方、極悪非道の「三悪人」の中に入れていない、ラインハルト・ハイドリヒに焦点を当てた映画は、『ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦』(16年)、『シネマ40』190頁)がある。

しかし、本作が描くヴァンゼー会議の主権者になるのはそのハイドリヒだから、本作では誰よりもそのハイドリヒに注目！会議の冒頭、ハイドリヒは、「組織面、実務面、物資面で必要な準備をすべて行い、欧州のユダヤ人問題を総合的に解決せよ。関係中央機関を参加させ、協力して立案し検討するように」とのゲーリング国家元帥の言葉を伝えて、会議目的を明確にしたうえで、さらに「ユダヤ人問題の最終的解決を実施せよ」、つまり、全ユダヤ人の絶滅を目標に掲げることを示したから、彼の権限はすごい。

他方、この時ハイドリヒは37歳だが、当時35歳で親衛隊中佐だったアイヒマンは、会議室の設営(席順)から議事録作成に至るまで、さらには、会議中、ハイドリヒから指示された個別の事項についての説明まで、実務面をすべて担当していたから、この有能な男、アイヒマンにも注目！

■□■省庁間の権益抗争は？各自の立論は？説得力は？■□■

「省益あつて国益なし。」これは国の各部署を司る省庁が、ややもすれば自分の省庁の利益ばかりを考え、他の省庁との兼ね合いや国全体の利益を忘れてしまうことだが、このフレーズは人間や権力の本質をついた名言だ。1941年12月8日に真珠湾を攻撃して、第2次世界大戦に突入した大日本帝国は、陸軍(省)と海軍(省)がそれぞれ自分の省益を主張して対立し、結局国益を誤ったが、1939年9月1日にポーランドを侵攻して第2次世界大戦に突入したドイツは？

本作導入部に登場するハインリヒ・ミュラー親衛隊中将が全体の座席を事前に確認する中で、気に入らない出席者を下座に移動させるシーンは面白い。ヒトラー率いるナチス党は、ヴァンゼー会議開催時は“飛ぶ鳥を落とす勢い”だったから、その会議を主催し、1、

100万人のユダヤ人絶滅政策を90分間の会議で確立させなければならないのは当然。そんなハイドリヒやアイヒマンにとっての、鬱陶しい相手は、第1に内務省や外務省等の頭の硬い官僚たち、第2はユダヤ人の処理を受け入れる各占領地の「既に満杯です」という現実的な訴えだ。そのため、ハイドリヒとアイヒマンがまさに“異次元の対策”として打ち出したのが、“銃殺”という効率も兵士の精神にも悪いやり方に変えて、殺人ガスを使うこと。これがベストというガスの種類が決まれば、後は世界一優秀な(?)ドイツ人の気質どおり、綿密な大量殺人計画を立てればいだけだ。どこにどうやってユダヤ人を集め、どこにどうやって移送し、どうやってガス室へ、そして、どうやってその死体処理を? そんな実務的な処理はすべてアイヒマンがお手のものだったらしい。

ちなみに、豊臣秀吉の部下には、武断派と文治派(近江派)がいた。前者の代表が加藤清正、福島正則、後者の代表が石田三成だ。石田三成は当時には珍しい有能な実務派だったから、朝鮮出兵における兵士の配置、船の手配、食糧の手配等々、すべてをやっていたが、本作でそれと同じ能力を発揮するのがアイヒマンだから、本作ではそこに注目!

他方、会議の席で意見が食い違った場合、その場でいかなる論理を展開して相手を打ち負かさずかは大切だが、それを根に持たれては困るもの。スクリーン上では、意見の対立がいくつか見られるので、それにも注目だが、最大の対立となった時に見せたハイドリヒのテクニックとは?なるほど、こんな手が!アイヒマンは実務派として優秀だったが、ハイドリヒが豊臣秀吉と同じような大所高所からの見事な判断を下す姿に脱帽!

■□■会議の意義は?閣議も役員会も虐殺会議もそれは同じ?■□■

アメリカ映画の最高傑作の1つである『12人の怒れる男』(57年)は、陪審員たちの陪審評議が表決に至る姿をリアルに描いたものだが、そこに見る人間ドラマは面白い。それと同じように、誤解を恐れずにハッキリ言えば、本作に見る90分間のヴァンゼー会議の様子は実に面白い。本件はラストに、「この『ヴァンゼー会議』によりホロコーストは加速。最終的に、国民社会主義者の支配下で600万人のユダヤ人が殺害された。」との字幕が表示される。まさに、ヴァンゼー会議は、議題とされた“1,100万人のユダヤ人絶滅政策”を、具体化、現実化、政策化するためのものだったわけだ。そして、現実はこの会議の数年後には、字幕どおりの“成果”を出したのだから、この会議は本作の邦題とされたとおり、「ヒトラーのための虐殺会議」になったことになる。しかし、会議とはナニ?会議の意義は?それを考えると、ヴァンゼー会議は、所定の目的を達成し、その議事録は実務的に大活躍したわけだから、会議は大成功したことになる。

戦前の日本には、“御前会議”なるものがあり、日米開戦は1941年12月1日の御前会議で決定されていた。また、私が監査役として約15年間、毎月1回、東京に出張していた株式会社オービックの取締役会では、毎回一定の議題があり、毎回議事録が作成され、それに沿って会社が経営されてきた。

戦後、アメリカ式の民主主義国になった日本では、天皇は象徴であって、国政には関与

しないから、閣議はもっぱら内閣総理大臣を中心に運営されるが、閣議で何をどう決定するかは、国の進路を定めるうえで極めて重要なことだ。昨年12月には、いわゆる安保三文書の改定が閣議決定でなされたが、それをどう評価すればいいのだろうか？

このように、会議の意義を考えればいろいろあるが、所詮、会議の目的は同じだから、閣議も役員会も、弁護団会議やヤクザの幹部会も、そしてヴァンゼー会議も、その意義は同じ！？したがって、それをあえて「ヒトラーのための虐殺会議」と名付けてみても、あまり意味はないのでは？もっとも、そのことは、ヴァンゼー会議で何がどのように議論され、その結論がどのように実行されたのかを評価することの重要性を否定するものではない。そんな視点で本作をじっくり検証したい。

ちなみに、“悪の陳腐さ、平庸さ”をテーマにした映画『ハンナ・アーレント』では、アイヒマンが世上で言われるような極悪非道の男ということに疑問が投げつけられていたが、本作のアイヒマンの有能を見ると・・・？石田三成は天下分け目の関ヶ原の戦いで徳川家康と戦い、同じ豊臣秀吉の部下だった加藤清正、福島正則らも敵に回して敗れ、殺されたが、それに比べるとアイヒマンは？私はついそんなことも考えてしまったが、さてあなたは？

2023（令和5）年1月30日記

ヴァンゼー会議 議事録

日時:1942年1月20日 12:00~13:30 場所:ドイツ・ベルリン、ヴァンゼー湖畔の邸宅

議題

1,100万のユダヤ人 絶滅政策について

- ① 移送
- ② 強制収容と労働
- ③ 計画的殺害

出席者:高官15名と秘書1名

ラインハルト・ハイドリヒ / アドルフ・アイヒマン / ハインリヒ・ミュラー
オットー・ホーフマン / カール・エバーハルト・シェーンガルト
ルドルフ・ランゲ / ゲルハルト・クロープファー
エーリッヒ・ノイマン / ヴィルヘルム・シュトゥッカー
アルフレート・マイヤー / ローラント・フライスター
フリードリヒ・ヴィルヘルム・クリツィンガー / ヨーゼフ・ビューラー
マルティン・ルター / ゲオルク・ライプブラント / インゲブルク・ヴェーレマン

作成日:1942年1月20日 作成者:アドルフ・アイヒマン

資料② 【『ヒトラーのための虐殺会議』パンフレットより】

